

炭火の愛

ヨハネ21:1~14 / 李正雨師

私は最近、毎週金曜日の夕方になると、炭火をおこしています。うちの子たちは火を起こすことが好きで、肉やサツマイモを焼いて食べることも好きなので、夜は少し肌寒いですが、金曜日の夕方になると、炭火をおこしています。先週は、炭火をおこしながら、このようなことを考えてみました。子供たちが大きくなって、炭火を見ると、多分父のことを思い出すかもしれないという考えでした。今は、単に焼くのが面白くて好きですが、いつかはこのことによって父のことを思い浮かべることがあるでしょう。そうすると、炭火はただの炭火ではなく、父への思い出になるのです。そしてその思い出の中で、父の愛を感じることもあるでしょう。今日の福音書でも、この炭火が出てきます。イエス様はこの炭火の周りに弟子たちを呼び集め、一緒に食事をなさいます。そしてこの食事の席は、弟子たちに色々なことを考えさせる場になったはずだと思います。

ドラマや映画や小説などを見ると、エピローグというものがあります。もともとこのエピローグというのは、作品のプロットの結末を称するものでした。しかし現代に至っては、作品のプロットを一段落させた後、特別な結末を付けて作品の完成度を高める装置として使われています。簡単に言えば、後日談のようだと見ることができます。今日の福音書であるヨハネによる福音書21章も、このようなエピローグの役割をしていると思います。それで私たちは、この21章を通して復活後のイエス様のお働きによって福音がどのように進められたのか、弟子たちがどのようにして福音の道に戻るようになったのかを知ることができます。そしてこれを通して、弟子たちに対するイエス様の愛も分かります。今日の福音書はこのように始まります。「その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちにご自身を現わされた。その次第はこうである(1節)。」

ここで「その後」とは、イエス様が弟子たち、特にトマスにご自分の復活を確認させた後を意味します。弟子たちはイエス様の復活を確認し、イエス様がメシアであることに気づきました。しかし、彼らは自分たちが何をすべきか、何のためにイエス様が復活なさったかは分からなかったと思います。以前のように復活なさったイエス様が自分たちを導いてくださると思ったかもしれませんが、しかし、イエス様は弟子たちの前には現れましたが、以前のように弟子たちを導かず、いつも一緒におられませんでした。それで弟子たちは、自分たちが一番上手にできる仕事に戻りました。今日の福音書3節の言葉です。「シモン・ペトロが、『わたしは漁に行く』と言うと、彼らは、『わたしたちも一緒に行こう』と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。」

おそらく弟子たちのこの選択は、当然のことだと思います。弟子たちは不安だったでしょう。イエス様が前のように自分たちと共におられることもせず、導かれることもなかったからです。ただ復活なさったことを自分たちに確認させてくださったただけでした。さらに、ペトロは復活なさったイエス様から、何の叱責も受けませんでした。ヨハネによる福音書第18章によると、ペトロはイエスを3度も打消しました。そして、このことを知っている他の弟子もいました(ヨハネ18:15)。むしろイエス様に叱られたら、心もすっきりしたでしょう。しかし、復活なさったイエス様は、ペトロに何の話もなさいませんでした。こういうことによって、ペトロはもっと良心の責めを受けたと思います。それで、ペトロは漁に行くことに先頭に立ったようです。しかし、ペトロだけでなく、他の弟子たちも、何も取れませんでした。彼らが上手にできるのは、漁を取ることかもしれませんが、彼らがしなければならないのは、そのようなことではなかったからです。

イエス様は魚を取ろうと尽くしている弟子たちのところに来られました。そしてこのように言われます。「『子たちよ、何か食べる物があるか』と言われると、彼らは、『ありません』と答えた(5節)。」私はこの節を読んだとき、なぜ弟子たちが気づかなかったのかが気になりました。弟子たちに「子たちよ」と言える人はイエス様以外にはいなかったでしょう。しかし弟子たちは気づきませんでした。これについて、ある学者たちは、「子たちよ」という言葉は、子供たちだけでなく、大人にも使われたからだと言います。ある

いは、これは「おい」と人を呼ぶ言葉だと主張することもあります。しかし、私は弟子たちが漁をすることに夢中になるあまり、自分たちを呼ぶ声に気づかなかったのだと思います。4節にも、弟子たちは岸に立っておられるイエス様のことが分からなかったと書かれています。自分のことだけに夢中になっていると、復活を経験した弟子といっても、イエス様を見分けることができないのです。

イエス様は自分の仕事だけに夢中になっている弟子たちに、船の右側に網を打ちなさいと言われます。そして弟子たちは網を引き上げることができないほど、たくさんの魚を取りました。ここで、イエスの愛しておられた弟子がペトロに「主だ」と言います。この言葉を聞いたペトロは、躊躇せずに上着をまとって、湖に飛び込みます。ある人は、この場面を見て、ペトロのせっかちな性格が現れた場面だと言います。しかし、このようなペトロの行動は、単に性格がせっかちだからだけではないでしょう。ペトロもイエスの愛しておられた弟子のように、多くの魚を取ったとき、網を打ちなさいと言われた方がイエス様であることが分かったでしょう。ルカによる福音書によると、ペトロもヨハネも、漁に関係したことによってイエス様に従ったからです。おそらく、ペトロが湖に飛び込んだのは、多くの魚を取った瞬間、自分の過ちが思い浮かんだからだと思います。イエス様に死に至るとも従うと言いましたが、三度も打消した自分の過去が思い出されたでしょう。だから誰よりも早くイエス様のところに行くために、彼は湖に飛び込んだのだと思います。

イエス様は、このようなペトロと漁だけに夢中になっていた他の弟子たちのために、炭火を起こしました。そして弟子たちのために食事を準備なさいました。9節の言葉です。「陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。」弟子たちがイエス様から与えられたのは、なぜ魚を取っていたのかという叱責ではありませんでした。夜通し魚を取っていた自分のための愛の朝食でした。弟子たちがイエス様のために行ったことは、何もありませんでした。かえってイエス様を打消し、自分の元の仕事に戻っただけでした。何一つごちそうになることを行なったこともないのに、イエス様は弟子たちのために食事を準備なさいました。そして13節の言葉のように、イエス様はパンを取って弟子たちに与えられ、魚も同じようになさいました。弟子たちのために聖餐を施したのです。

私はこの場面を読んで、旧約聖書の一つの場面を思い出しました。すべてのことをあきらめたまま、エシダの木の下に座り、文句を言うエリヤの姿でした。エリヤはイゼベルから命の脅迫を受けると、神様にこのように祈ります。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません(列王記上19:4)。」そのようなエリヤの祈りは、預言者としてふさわしくない祈りでした。神様に信頼しないことでした。しかし、神様はこのようなエリヤを叱らず、天使を遣わされてエリヤに焼いたパンと水を食べさせます。これによってエリヤは力づけられ、再び預言者として立つことができました。

弟子たちの前に置いたパンや魚の意味もこれと同じだと思います。イエス様は弟子たちが力づけられることを願っておられるのです。自分の過去によってつまづいている弟子に、何をすべきかわからず、自分の元の仕事に戻った弟子たちに、力を与えてくださっているのです。この食事によって、弟子たちはすべてのことを回復するのです。自分のすべての過ちから自由になり、失われた召命を取り戻すことになるのです。力づけられること。これがイエス様が食事を準備してくださった理由だと思います。そして私たちも、毎週このような食事の席に招待されています。毎週、礼拝の中で行われる聖餐式を通して、私たちはイエス様に励まされているのです。私たちがイエス様のために行ったことは何もありませんが、時には、罪を犯したこともあります。イエス様は、毎週私たちを聖餐式の場に呼ばれ、私たちに愛の食事を施してくださいます。そして、この一方的な愛を通して、私たちに力を与えられ、再び弟子として生きることができるようになってくださるのです。これが、私たちが毎週聖餐式が行われる理由なのです。今日も、この恵みの場で大喜びをもって与る皆様になりますように。この食事の励ましによって、すべてのことを回復する皆様になりますように、主の御名によって祈ります。アーメン